

のら犬

新美南吉

青空文庫

常念御坊は、暮がなによりもすきでした。きようも、となり村の檀家へ法事でよばれてきて、お昼すぎから暮をうちつづけ、日がかげってきたので、びっくりしてこしをあげました。

「まあ、いいじゃありませんか。これからでは、とちゅうで夜になってしまいます。今夜は、とまっていらつしやいましょ。」
と、ひきとめられました。

「でも、小僧がひとりで、さびしがりますから。さいわいに風もごぎいませぬので。」
と、おまんじゅうのつつみをもらつて、かえつていきました。

常念御坊は歩きながらも、暮のことばかり、考えつづけていました。さつきのいちばんしまいの、あすこのあの手はまずかった。むこうがああきた、そこであすこをパチンとおさえた、それからこうきたから、こうにげたが、あれはやつぱり、こっちのところへ、こうわたるべきだったなどと、むちゅうになつて、歩いてきました。そのうちに、その村

のはずれに近い、烏帽子えぼしをつくる家の前まできますと、もう冬の日も、とつぷりくれかけ
てきました。

しばらくしてなんの気もなく、ふと、うしろをふりかえってみますと、じきうしろに、
犬が一ぴきついてきています。きつね色の毛をした、耳のぴんとつたつた、あばらの間
のやせくぼんだ、ぶきみな、よろよろ犬です。どこかここいらの、かい犬だろうと思いな
がら、また暮ごのことを考えながらいききました。

一、二丁ちやういって、またふりむいてみますと、さっきのやせ犬が、まだとぼとぼあとを追
つてきています。うす暗いおうらいのまん中で、二、三人の子どもが、こまをまわしてい
ます。

「おい、坊ぼう。この犬はどこどこの犬だい。」

子どもたちは、こまを足でとめて、御坊ごぼうの顔と犬とを見くらべながら、

「おらア、知らねえ。」

「おいらも、知らねえ。」

といいました。

常念御坊じょうねんごぼうは、村を出はずれました。左右は麦畑おかのひくい岡で、人っ子ひとりおりま

せん。うしろを見ると、犬がまだついてきています。

「しっ」といって、にらみつけましたが、にげようともしません。足をあげて追うと、二三尺じやくひきさがって、じつと顔を見えています。

「ちよつ、きみのわるいやつだな。」

常じよう念ねん御ご坊ぼうは、舌したうちをして、歩きだしました。あたりはだんだんに、暗くなってきました。うしろには犬が、のそのそついてきているのが、見なくもわかっています。

すっかり夜になってから、峠とうげの下の茶店のところまできました。まっ暗い峠を、足さぐりでこすのはあぶないので、茶店のばあさんに、ちようちんをかりていこうと思いましたが、

おばあさんは、ふろをたいていました。ちようちんだけかりるのも、へんなので、常じよう念ねん坊ぼうは、

「おい、おばあさん。だんごは、もうないかな。」

とききました。

「たつた五くしのこつていますが。」

「それでいい。つつんでおくれ。」

「はいはい。」

と、おばあさんは、だんごを竹の皮につつまみます。

「すまないが、わしに、ちようちんをかしておくれんか。あした、正しょうかん観かんにもつてこさせるでな。」

「とても、やぶれぢようちんでござんすよ。」

「いいとも。」

おばあさんは、だんごをわたすと、上へあがつて、古ちようちんのほこりをふきふき、もつてきました。常念坊じょうねんぼうは、ちようちんにあかりをつけると、あたりを見て、

「おや、もう、どつかへいったな。」

と、ひとりごとをいいました。

「おつれさまですかね。」

「いんにや。どこかの犬が、のこのこついてきて、はなれなかつたんだよ。」

「きつねじゃありませんか。あなたの通つていらつしやつた、あのさきのやぶのところに、よくきつねが出て、人をばかすといえますよ。」

「おもしろくもないことを、いいなさんな。ほい、おあしをここへおくよ。」

常念坊じょうねんぼうはかた手におまんじゅうのつつみと、ちようちんをさげ、かた手にだんごの

つつみをもつて、峠とうげにかかりました。その峠をおりて、たんぼ道を十丁ちようばかりいくと、じぶんの寺です。

もう、あのいやな犬もついてこないの、安心して、てくてくあがつていきますと、やがてうしろのほうで、クンクンという声がします。

「おや、また、あの犬めがきたな。」

と、常念坊じようねんぼうは思いました。

かまわず、どんどんいきましたが、ふと考えました。うしろからくるのは、犬ではなくて、おばあさんがいった、あのきつねがつけてきたのではなからうか。こう思うと、じぶんのうしろには、ずるいきつねの目が、やみの中に、らんらんと光っているような気がします。気の小さな常念坊じようねんぼうは、ぶるっと、身ぶるいをしました。

でも、うしろをふりむくのもこわいので、ぶきみななりに、ぐんぐん歩きました。なんだかうしろでは、きつねがいつのまにか女にばけていて、今にも、きやつと行って、とびついてきそうな気がします。

常念坊じようねんぼうは、そのきつねのことを、わすれようわすれようとするように、ちようちんのあかりばかりを、見つめて歩きました。

二

やつとのこと、村へきました。村へはいると、すこしほっとしました。村では、どのうちも、よいから戸をしめてしまうので、どここも、しいーんとしています。その中で、どこかのうちで、きぬたをうつ音が、とおくにきこえます。

そのとき、ふと気がついてみますと、左手にもっていた、だんごの竹の皮づつみが、いつのまにか、なくなっています。

「おや、しまった。うっかりして、落としたかな。それともきつねのやつが、そつと、ぬすみとつてにげたかな。ちよつ。」

常念じょうねんごぼう御坊ごぼうはいまいましそうに、おまんじゅうのつつみと、ちようちんとを両手にもちわけて、うしろをむいてみました。

もう、なにもおりません。やがて、寺の門の前にきました。立ちどまって、もう一ぺん、うしろをよく見ますと、きつねらしいものが、のこのこつけてきています。

常念坊じょうねんぼうは門をはいると、

「正観、正観。」

と、庫裡のほうへむかつてどなりました。

「はい。」

とへんじがきこえて、正観が、ごそごそ鐘楼からおりてきました。

「おい。きつねだ、きつねだ。ほうきをもつてこい、ほうきを。ほうきで追いまくれよ。」

正観はとんでいって、ほうきをもつて、門のほうへかけつけました。

「おや。きつねがなにか、くわえていますよ。」

「ああ、だんごだ。とりあげろよ。」

「はい。下へおけ。——だんごは、とりかえしましたが、きつねはすわったきり、にげません。」

「だから、ほうきで追っばらえというのに。」

「ちきしょう。にげんか。しつ、しつ、しつ。」

と、正観はほうきで追いまくりました。

「ほうい、ちきしょう。こちらっ。」

と正観は、そつちこつち追いかけて、とうとう外へにがしてしまいました。

「にげたか。」

「にげました。」

「正観。」

「はい。」

「なんでおまえは、今ごろ鐘楼なんぞへ、あがっていたのだ。」

「さびしかったから。」

「鐘楼へあがってれば、さびしくなくなるのか。」

「鐘をゲンコツでたたくと、おん、おん、おんと、和尚さんの声みたいな音がするんで

す。」

「なにをいいおる。」

和尚さんは、ころもをぬいで、ろばたで、おぜんにすわって、ぎぶぎぶと、お茶づけをながしこみはじめました。正観は、おみやげのだんごを、ひろげました。

「和尚さん。あの犬は、どこからついてきたのです。」

「となり村から、しつっこく、あとをつけてきたのだよ。」

「どうして。」

「どうしてだか、知らないよ。」

「ばかしやあ、しませんでした?」

「おれがきつねなぞに、ばかされてたまるかい。」

「きつねですか、あれは。」

「……………」

「犬みたいだったがな。そのしょうこに、正観しょうかんはそばへよつても、ちつとも、こわくはなかつたがなあ。」

常念御坊じょうねんごぼうは、はしをおいて、考えこんでいました。あんどんのあかりが、そのくるくる頭へ赤くさしています。

しばらくして、常念御坊じょうねんごぼうは、

「正観しょうかん。」

と、すこし、きまりわるそうにいいました。

「そのちようちんを、つけよ。」

「はい。」

「わしは、ちよつといつて、さがしてくるでな。おまえは、本堂ほんどうのえんの下へ、わらを

どっさり、入れといてくれ。」

「なにをさがしに？」

「あの犬を、つれてくるんだ。」

「きつねでしょう、あれは。」

「かわいそうに。犬なら、のら犬だ。食いものも、ろくに食わんとみえて、ひどくやせかけていた。はるばる、となり村から、わしについてきたのだから、あつたかくして、とめてやろうよ。」

それに、わしの落としただんごまで、ちゃんと、くわえてきてくれたんだもの。おれがわるいよと、これだけは心のなかでいって、常念御坊じょうねんごぼうは、ちようちんをもって、出ていきました。

青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集 第一巻 ごんぎつね」大日本図書

1960（昭和35）年6月20日初版発行

1978（昭和53）年7月31日34版発行

初出：「赤い鳥」

1932（昭和7）年5月号

※底本で括弧書きされている編集部注は削除しました。

入力：鈴木厚司

校正：佳代子

2004年2月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

のら犬

新美南吉

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>